

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

19-12-27 MG 研究会

タイトル：「文法の動的体系性を探る（1）：文法の多重性と分散性」（2019年度第1回研究会（通算第6回目））

日時：2019年12月27日（金曜日）午後1時より午後6時

場所：AA 研セミナー室（301号室）

報告者名（所属）：

- 1) 中山俊秀（AA 研所員）「多様な個人の多様な文法がまとまるメカニズムを考える」
- 2) 伝康晴（千葉大学）「相互行為の規範の社会性と認知能力の個人性の連関」
- 3) 木村大治（京都大学）「コードが共有されない相手とのコミュニケーションの創発」
- 4) オープンディスカッション「個別的知識・個人的知識と社会的知識」

研究会のテーマ

本研究課題では、一つの言語システムに内在する多様性・多重性について考察・議論を重ねてきた。今年度は、多様性・多重性を含みながらも言語システムが一つの体系をなしているかのように振る舞うのはどうしてなのか、多様な個人、多様な要素が一つの体系として連携して見えるのはどうしてなのか、という問題にも考察を広げていく。今回は、個人の文法知識が個別の経験に基づいて形成されているにも関わらずコミュニケーションが成立する仕組みについて多様なアプローチから考える。

発表及びディスカッションのポイント

- 1) 中山俊秀「多様な個人の多様な文法がまとまるメカニズムを考える」

コミュニケーションの成立には同じ文法コードを共有していることも、同じ理解を共有していることも必須ではない。実際の相互行為においては、言葉の意味が正確にわからなくても、誤解していたとしても、コミュニケーションの破綻とは見なせない。コミュニケーション成立のカギとなる「通じている」状態、もしくはコーディネーションが取れている状態とは言語表現の正確なやり取りよりも大きな概念であると思われる。言語使用はコーディネーションを取るための戦略として行われ、文法規則はコーディネーションを作り出すためのリソースであると考えの方が適切である。特に対面コミュニケーションにおける文法はコーディネーション創出メカニズムに埋め込まれており、その正確な理解と記述には、コーディネーションという機能的コンテクストを踏まえ、もっぱら個別規則体系としての最適化（整合性・統合性・効率性）を前提とする発想から、個別体系間のコーディネーションと

いうニーズを満たす最適化圧力を合わせて考える発想に切り替える必要がある。

2) 伝康晴（千葉大学）「相互行為の規範の社会性と認知能力の個人性の連関」

行為主体の存在は知覚や体験のフィールド（「認知場」）をもたらすが、社会的関係性を持った複数の行為主体の間では、それぞれの認知場が重なった「相互認知場」が生まれる。相互認知場においては話者交替のようなコーディネーションが創発しうるが、このコーディネーションは行動規則の共有などによって起こるのではなく、より単純な刺激特性への反応行動の相互作用の中から生じる。

3) 木村大治（京都大学）「コードが共有されない相手とのコミュニケーションの創発」

コミュニケーションの方法としては、共通のコードを用いることが馴染みがあるが、宇宙人のように、我々がコードを全く共有していないと考えられる相手との間にコミュニケーションが可能であろうか。そのような場合であっても、例えばお互いに相手の行為をそのまま模倣するというやりとりが起これば、そこには何かの通じ合いが生まれている。これは「同じメッセージを送り合う」という意味での「相称性」に基づく規則性を構築しているわけであるが、これこそがコミュニケーションの本質であろう。コードは関係性の中に規則性を作り上げるための道具、あるいはリソースとして使われているに過ぎないのであって、コミュニケーションを成り立たせる前提ではない。